

1.かわさき宙と緑の科学館

1-1.自分で発見させる仕掛け

展示物には、見る人が自分で何かしらの動作をして発見させる仕掛けが施されていた。例えば、植物の写真の後ろにはその植物と関係のある虫の写真が用意されている仕掛けである。見る人が植物の写真をめくることによって、虫を発見することができる。カエルの展示では幼生のイラストが描かれており、その下にある穴を覗くと成体のカエルを見ることができる仕掛けだった。他にも、引き出しを開けたり、扉を開いたりすることによって新たな情報を見ることができるような仕掛けがあった。実際の自然の中で行う、観察して発見するという行為を擬似的に体験させる意図があると感じた。初めから全てを見せないことによって、発見したときの驚きやワクワク感を演出することができていると思った。

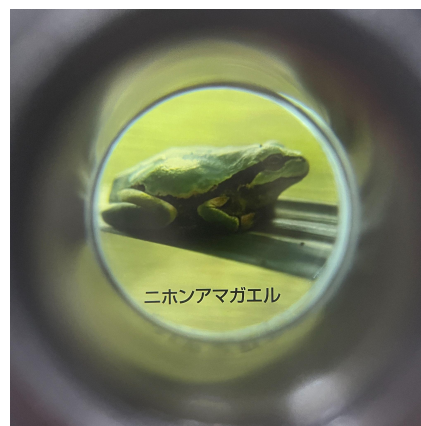


図1.カエルの展示

1-2.本物の自然環境を忠実に再現

虫や鳥、動物の剥製がたくさんあった。剥製を用いることで大きさや質感が非常にリアルで、迫力が感じられた。また、その生き物が生息する環境を写真や模型で再現していた。特に模型は、落ち葉や共に生息している生き物まで再現されていてどのような自然環境なのかひと目でわかるように工夫がなされていた。他には、ボタンを押すと虫の鳴き声が流れたり、タネが落ちてくる様子を見たりすることができるようになっていた。本物の自然に触れているような感覚を味わうことができ、実際の環境をイメージしやすくする仕組みになっていると感じた。



図2.タヌキの剥製



図3.カニの生息地の様子

1-3.クイズ形式で学ばせる

展示の至る所にクイズがあった。地面にあいた穴や植物にくっついていいるものは何かを問いかけて、クイズの書いてあるものをめくると答えが表示される仕組みになっていた。生き物の見た目が印象に残りがちだが、クイズにすることによってその生き物の習性や特徴を印象付ける工夫をしていると感じた。問いかけられることで、よく考えて観察する時間を作ることができるのが良いと思った。似ている植物を並べてどれが本物のたんぽぽなのか当てるクイズが面白かった。比較することで、知らなかった特徴を発見することができたり、細かな違いをよく観察したりする体験ができた。



図4.クイズ形式の展示

2.生田緑地

たくさんの生き物の存在を身近に感じることができた。初めは植物の印象が強かったが、歩いていると虫の鳴き声や鳥が移動している音などを聞くことができた。セミが鳴いていたのだが、よく聞くと様々な鳴き声が混ざっていて違う種類のセミがたくさんいると気づいた。セミ以外の虫の鳴き声やカエルの鳴き声、カサカサと何かが動いている音が聞こえてきた。池を覗くと、アメンボやザリガニ、小さい魚などが生息していた。他にも、緑地を散歩しているとトンボやバッタ、蝶など

を実際に見ることができた。植物の近くには、植物の名前や特徴の説明が書かれてあって、実物を見ながら情報を学ぶことができるようになっていた。ナツミカンには実がなっていて、植物の状態から季節を感じる体験ができた。季節や天候などによって、違った自然現象を楽しむことができる場所だと感じた。



図5.ナツミカンの木